体験活動をいかした道徳授業に関する一考察

高知大学大学院　総合人間自然科学研究科　教育学専攻　学校教育コース　指導教員　内田純一
津野町立精華小学校　教諭　若林庄司

１　はじめに

平成 27 年３月 27 日、学校教育法施行規則が改正され、「道徳」が「特別の教科である道徳」となり、平成 30 年 4 月から小学校、平成 31 年 4 月から中学校の道徳科の全面実施に向けて動き出した。

こうした中、道徳授業は、児童生徒に道徳性を育む上で、学校の教育活動全体を通して行う道徳教育の要として、有効に機能していくことが求められているところである。

道徳の時間の目標から考えると、道徳授業が道徳教育の要として有効に機能するためには、学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育と道徳授業の関連を図り、計画的、発展的な指導によって、これを補充、深化、統合していくことが重要である。

子どもたちは、学校の教育活動全体を通じて行われる道徳教育から、様々な、道徳的体験を得て、思考や感情を深める。しかし、それらの道徳的体験は、小中学校で取り扱う内容の道徳的価値全体にわたって行われるわけではない。そこで、道徳授業は、学校の教育活動全体で行わる道徳教育の要として、それを補充、深化、統合する役割を果たす必要がある。道徳授業が、この役割を十分に果たすことによって、道徳的価値の自覚がなされ、道徳性が養われる。したがって、各教科等で行われる道徳教育と道徳授業の相互の関連が図られるともに、学校の教育活動全体で行われる道徳教育が調和的にいかされる道徳授業を行うことが望まれるのである。

そこで、道徳教育を補充、深化、統合し、体験活動をいかす道徳授業が十分に行えているのかを把握するために、高知県の小中学校教員対象にアンケートを実施した。その結果、他の教育活動で行った体験活動と道徳授業を十分に関連付けた授業は行われていないことが明らかになり、道徳授業を道徳教育の要として機能させていくためには､各教科等の体験を通して得た道徳的価値を道徳授業において補充、深化、統合するための具体的な指導の在り方を明らかにしていく必要があることが浮び上ってきた。そこで、本論文においては、こうした課題に対応して、体験活動をいかした道徳授業を多様に構想し、その実践を行って、効果を考察することとした。

２　研究の構想

本論文では、体験活動をいかした道徳授業を、三つのタイプ別に構想し、その授業を実践する。

（１）　【実践１】(導入での体験活動の活用)
（２）　【実践２】(導入・展開での体験活動の活用)
（３）　【実践３】(総合単元的な道徳学習)

３　体験活動をいかした道徳授業の効果の検証方法

（１）　連想法を用いて、道徳的価値の理解に対する意識の変容を捉え検証する。

道徳授業の評価法の一つとして上薗が提唱する連想法を用いて、授業前後の児童の道徳的価値に対する意識の変容を読み取り、ねらいとする道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めることができていたのか、多面的・多角的な見方へと発展させることができていたのか検証する。

（２）　児童の発言や感想等を用いて、児童の道徳的価値の自覚の深まりを検証する。

授業中の児童の発言内容や、授業後に書かれた児童の感想文の内容を道徳的価値の自覚が深められているかという点で分析する。その際の視点は、以下の二つとする。

「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている」…【実践１】、【実践２】、【実践３】

「道徳的価値について多面的・多角的な見方へと発展させている」…【実践２】、【実践３】

＊実践２、３については、「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている」に加えて、「『特別の教科　道徳』の指導方法・評価等について(報告)」（平成 28 年７月）に示された「道徳的価値について多面的・多角的な見方へと発展させている」の視点も加えることにした。

４　研究内容

（１）　【実践１】導入時に体験活動をいかす工夫を取り入れた道徳授業の実践

①　【実践１】教材名「亡き母へのトランペット」

平成 27 年 10 月、A 小学校６年１組(37 名)(体験活動をいかした授業)【実践１-①】

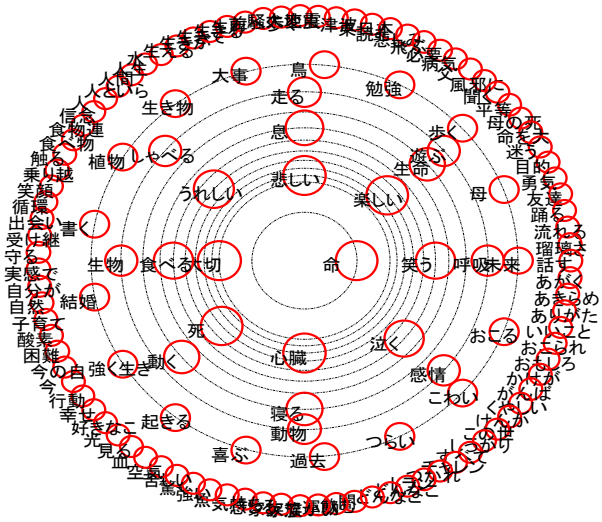
６年２組(36 名)(体験活動の意図的な活用がない授業)【実践１-②】

ア　授業前に、児童が自主課題として、各自で東日本大震災についての調べ学習を行う。また、同時に東日本大震災について調べて分かったこと・感じたこともワークシートに記入する。

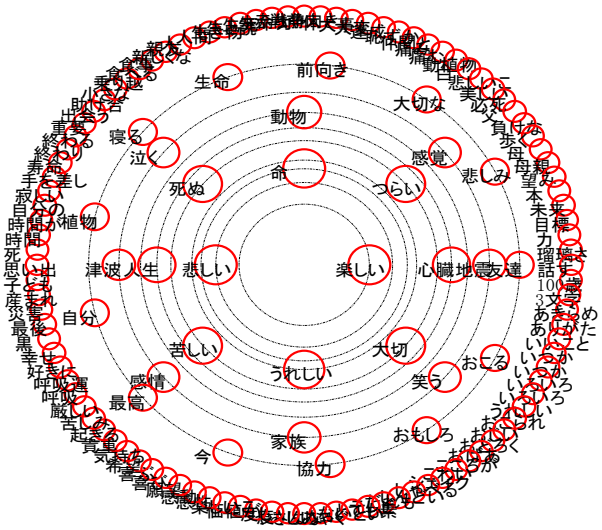
イ　授業の導入時に東日本大震災について調べた調査物や調べた感想を発表させることで、体験活動を想起させ、主人公の状況や心情を共感的に捉えさせる工夫を行う。

ウ　児童の体験活動に沿った資料を使用する。(体験活動の内容を資料選択にいかす)

②　結果と考察



［図１］連想マップ「生きる」１組　授業後



［図２］連想マップ「生きる」２組　授業後

連想法において、授業前と授業後に現れた言葉について、増加の大きかった言葉、授業後の新しく出現した新出語を１組と２組で比較し、授業に体験をいかした時の効果を検証する。［図１］［図２］

授業後に増加の大きかった語は、１組「大切」「悲しい」「死ぬ」「泣く」、２組「悲しい」「うれしい」「つらい」「苦しい」であった。１組の「死ぬ」「泣く」は、資料の主人公が体験したこと(母の死・涙を流しながらトランペットを演奏)そのものである。このことから、授業の導入に体験活動をいかした工夫を行うことにより、児童が資料の世界をより具体的に想像できていたことが分かる。

また、１組には「強く生きる」「しっかり生きる」「乗り越える」「どんなことがあっても生きる」「強い」「勇気」といった２組にない語がねらいに関わる新出語として出現している。より多様に人間の強さをイメージして捉えていることが分かる。

以上の、【実践１】の分析の結果、次のようなことが明らかになった。

道徳授業の導入時に、体験活動をいかす工夫を取り入れると、児童は、資料の主人公の立場や思いを、具体的にイメージし自分の思いと重ね合わせて考えることができ、ねらいとする道徳的価値を抽象的な思考にとどまらず、具体的にイメージし自己との関わりで捉えることに有効に働く。

（２）　【実践２】学校行事と道徳授業を関連付け、導入時や展開時に体験活動をいかす工夫を取り入れた道徳授業の実践

①　【実践２−①】教材名「きっとできる」平成 28 年９月、B 小学校４年生(10 名)

ア　授業前に、道徳授業で活用する体験活動として、児童は、体育の時間や休み時間に、運動会の取組種目である竹馬の練習を行う。

イ　授業の導入時に体験活動を想起させたり、展開時の中心発問において体験活動を振り返り、その時の思いをもとにねらいとする道徳的価値について考えさせたりする工夫を行う。

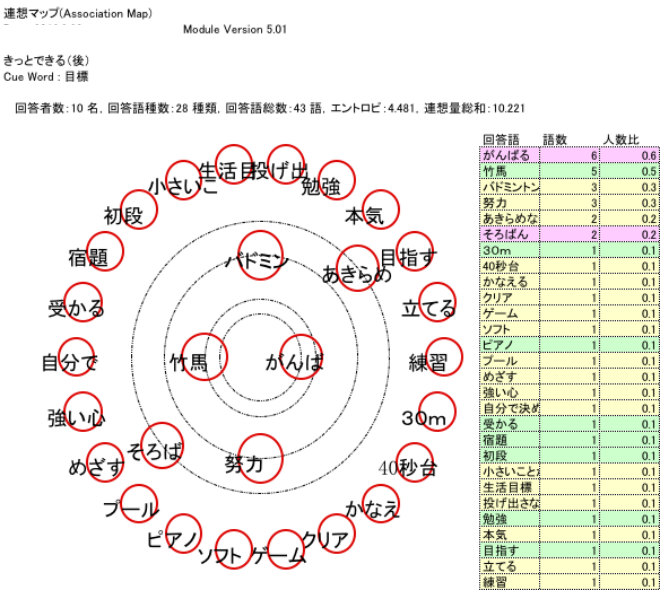
ウ　児童の体験活動に沿った資料を使用する。(体験活動の内容を資料選択にいかす)

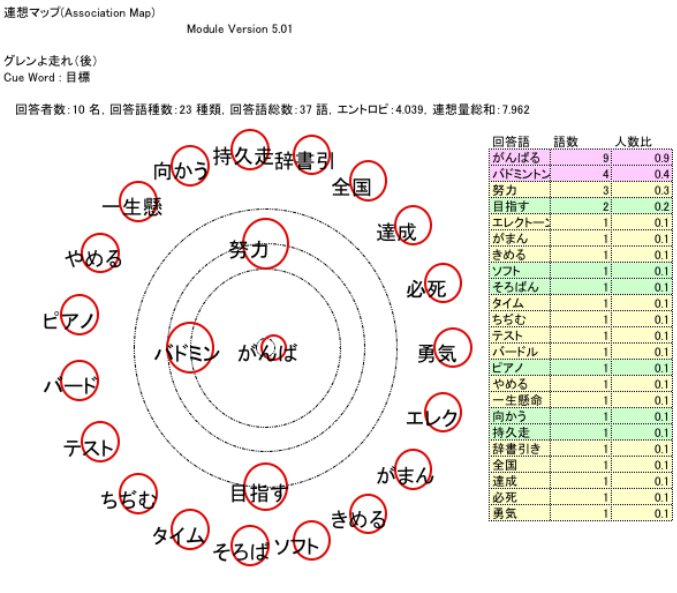
②　【実践２−②】教材名「グレンよ、走れ」平成 28 年 12 月、B 小学校４年生(10 名)

ア　体験活動の意図的な活用のない授業

③　結果と考察

ア　連想法の分析　キーワード「目標」について





［図　３］連想マップ「きっとできる」授業後　［図　４］連想マップ「グレンよ、走れ」授業後

赤:授業後に増加　緑:授業後の減少　黄：授業後に新出

体験活動をいかした「きっとできる」と体験活動の意図的な活用のない「グレンよ、走れ」の授業後のキーワード「目標」から連想された言葉を比較すると、「きっとできる」の授業では、「努力」「あきらめない」「強い心」「本気」「投げ出さない」「小さな目標を立てる」といった語が授業後に出現していたため、体験活動をいかした授業では、ねらいとする価値についての考えを多面的に広げていくことに効果があると考える。［図３］［図４］

イ　児童の感想文の分析

［表 1］　児童の感想文を、二つの視点をもとに分析した結果

	観点	ねらいとする道徳的価値	道徳的価値について多面的・多角的な見方へと発展している	道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている
【実践 2-①】	（体験活動をいかした道徳授業） きっとできる（n=10）	1-（2） 勤勉・努力	１００％	７０％
【実践 2-②】	（体験活動の意図的な活用のない道徳授業） グレンよ、走れ（n=10）	1-（2） 勤勉・努力	６０％	４０％

体験活動の意図的な活用のない「グレンよ、走れ」の授業では、「グレンがあきらめず稽古や歩く練習を続けたことをすごいと思う。」というように、児童の感想文の記述が努力を続けたグレンの思いや行動から理解される道徳的価値に集約されてしまった。「グレンよ、走れ」の授業とは対照的に、体験活動をいかした「きっとできる」の授業では、「何事もあきらめずやれば、いつか最高のものになる。」「練習も、目標を持っているからがんばれるのだと思う。」「最後までやり遂げるのに大切なことは、努力やあきらめない思い。」「難しいことでも、努力し何回も練習するとできるようになる。」というように道徳的価値について多様に捉えた感想文の記述がすべての児童 100%（10 名/10 名）に見られた。児童は、目標をもってその達成のために努力を続けることの大切さを、児童自身の体験と重ね合わせて考えることで、多面的・多角的な見方へと発展させていることが分かる。

また、体験活動をいかした「きっとできる」の授業は、「がんばればきっとできる。なので、何事にも挑戦していきたい。」「バドミントンの四国大会に行けるように練習がんばりたい。」など、道徳的価値を自分自身との関わりで捉えた記述が、70%（7 名/10 名）だった。対して、体験活動の意図的な活用のない「グレンよ、走れ」の授業は、道徳的価値を自分自身との関わりで捉えた記述が、40%（4 名/10 名）だった。体験活動をいかした授業は、体験活動の意図的な活用のない授業と比較して道徳的価値を自分自身との関わりで深めることに効果があると考えられる。

ウ　授業の効果のまとめ

【実践２】の結果、次のようなことが分かった。体験活動をいかした道徳授業は、体験活動の意図的な活用のない道徳授業と比較すると、児童が道徳的価値を自分自身との関わりで捉えることが容易となる。事前の体験活動を想起させたり、体験活動のときの思いを話させる発問を行ったりすることで、体験活動時に感じた自分の弱さや、喜びを思い出し、その思いをもとに道徳的価値について考えることができる。そのため、今後、自分はどのように行動していこう、どのように行動すべきなのかを考え、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題をもつことが容易になる。

また、体験活動時の児童の個々の思いをもとに考えたり、その考えを友達と交流したりすることで、ねらいとする道徳的価値について多面的・多角的な見方へと発展させていくことができる。

以上のことをまとめると、次の２点のことが明らかになった。

①学校行事と道徳授業を関連づけ、導入時や展開時に体験活動をいかす工夫を取り入れると、児童は、体験活動時の思いをもとに道徳的価値について考えることができる。そのため、道徳的価値を自分自身との関わりでとらえ、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題をもつことに有効に働く。
②体験活動時の児童の個々の思いをもとに考えたり、その考えを友達と交流したりすることができ、ねらいとする道徳的価値について多面的・多角的な見方へと発展させていくことにも有効に働く。

（3）　【実践３】総合単元的な道徳学習の実践

①　【実践３】教材名「新荘川にすみ続けたカワウソの話」平成 28 年６月、B 小学校４年生(11 名)

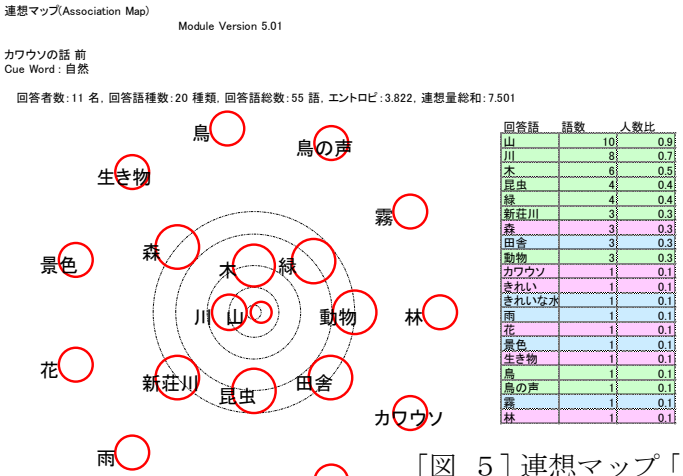
ア　総合単元的な道徳学習を行い、事前体験によって得られた児童の意識を把握する。体験によって得られた児童の意識をいかした道徳授業を計画し実施する。
（体験活動によって得られた児童の意識を道徳授業の計画にいかす）

イ　授業の導入時に事前に体験活動を振り返りその思いを発表させることで、体験活動を想起させる。（体験活動で得られた児童の意識や思いを道徳の時間の展開にいかす）

ウ　児童の体験に沿った資料を使用する。（体験活動の内容を資料選択にいかす）

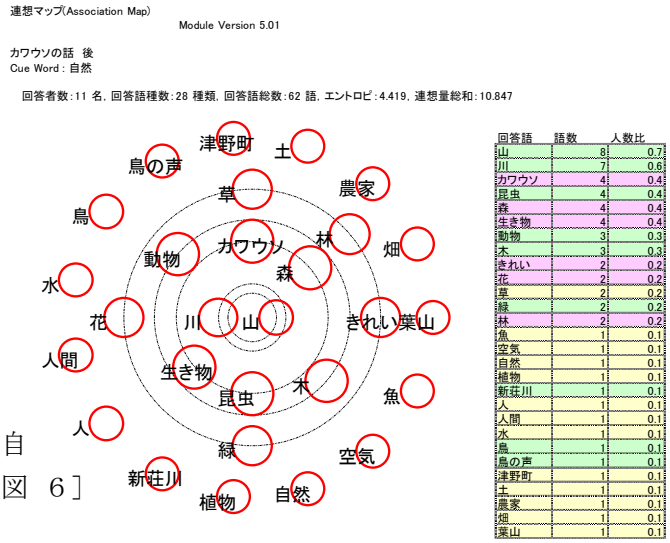
②　結果と考察

ア　連想法の分析　キーワード「自然」について



回答語	語数	人数比
山	10	0.9
川	8	0.7
木	6	0.5
昆虫	4	0.4
緑	4	0.4
新荘川	3	0.3
森	3	0.3
田舎	3	0.3
動物	3	0.3
カワウソ	1	0.1
きれい	1	0.1
きれいな水	1	0.1
雨	1	0.1
花	1	0.1
景色	1	0.1
生き物	1	0.1
鳥	1	0.1
鳥の声	1	0.1
霧	1	0.1
林	1	0.1

［図　５］連想マップ「自然」授業前



回答語	語数	人数比
山	8	0.7
川	7	0.6
カワウソ	4	0.4
昆虫	4	0.4
森	4	0.4
生き物	4	0.4
動物	3	0.3
木	3	0.3
きれい	2	0.2
花	2	0.2
草	2	0.2
緑	2	0.2
林	2	0.2
魚	1	0.1
空気	1	0.1
自然	1	0.1
植物	1	0.1
新荘川	1	0.1
人	1	0.1
人間	1	0.1
水	1	0.1
鳥	1	0.1
鳥の声	1	0.1
津野町	1	0.1
土	1	0.1
農家	1	0.1
畑	1	0.1
葉山	1	0.1

［図　６］連想マップ「自然」授業後

赤:授業後に増加　緑:授業後の減少　黄：授業後に新出

連想語の変化を見ていくと授業後に、［図６］のように、新出語として「人」「人間」「農家」「畑」といった「人間」が関係する言葉が現れている。このような「人間」が関係する言葉は授業前に現れていない。［図５］、児童の「自然」のイメージに「人間」という視点が生まれ、より多面的な見方ができるようになってきている。

また、授業後に「津野町」「葉山」といった自分たちの住んでいる地域名も新出語として現れている。授業中に自分の身の回りの自然を思い浮かべ、自分自身との関わりを持って「自然」について考えていたことが分かる。

イ　児童の感想文の分析

［表 2］　児童の感想文を二つの視点をもとに分析した結果

観点		N=10	主な文章
道徳的価値について多面的・多角的な見方へと発展している。	自然や動植物を大切にすることで、自分の生活や命が守られる、自然や動植物を大切にするためには、それを守ろうとする人間の働きかけが重要だという多様な見方をもっている。	81.8%	・カワウソがすみ続けられる川も大事だけど、人間の安全で便利な暮らしも大事だと思う。 ・川にゴミを捨てていたら自然が汚くなってしまう、川にゴミを捨てたりせず、ゴミが落ちていたら拾おう。 ・自然や動物を守りたいから、ゴミを捨てないようにしたい。
道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている。	身近な自然や動植物と自分との関わりについて考え、これから、身近な自然や動植物を大切にしていこうという思いを持っている。	90.9%	・私は川にゴミを捨てないけど、ゴミが落ちていたら拾おうと思う。 ・川や山にゴミが落ちていたら拾おうと思う。 ・自然を守るために、ゴミを捨てないようにしたり、地域の人に呼びかけたりしたい。

［表２］を見ると、「私は川にゴミを捨てないけど、ゴミが落ちていたら拾おうと思う。」「自然を守るために、ゴミを捨てなかったり、地域の人に呼びかけたりしたい。」というように「道徳的価値を自分自身との関わり」で考えた記述は 90.9%(10 名/11 名)であり、ほぼ全員の児童が、自然は大切だということを理解するだけでなく、自然を守っていくために自分はどうすればいいのかに言及している。

そして、「ゴミを捨てないようにした」などそのように考えた理由を分析すると、「(川をきれいにして)カワウソを生き返らせてあげたい」「川をきれいにしてカワウソが戻ってきてほしい」というように記述し、人間が自然を守ることは、そこにすむ動物を守ることにつながることに気づいている児童(６名)やさらに、「人間も大切だけどカワウソも大切だ」「カワウソがすみ続けられる川も大事だけど人間の安全で便利な暮らしも大切(両方大切だ)」というように記述し「自然・動物」と「人間」との共存に気づいている児童(３名)がいた。ただ川をきれいにして守らなければならないと考えるのではなく、人間の関わり方・働きかけ方が動植物を守っていくためには大切だというように、道徳的価値について多面的・多角的な見方へと発展させることができた。

事前の体験活動時の感想では、ほとんどの児童が「人間」がカワウソを殺したことがひどいと考えていたが、道徳授業を通して「人間」「動物・自然」の視点を持ち「自然・動物」と関わっていく新たな道徳的価値に気づくことができた。道徳的価値を多面的・多角的に考えた結果であると考える。

また、連想法の結果からも分かるように児童は、授業中に自分たちの新荘川での体験や体験活動時の思いや様子を想起しながら道徳的価値について考えている。総合単元的な道徳学習を行い、体験活動を道徳授業にいかしたことで、道徳的価値を自分自身との関わりで考え、きれいな新荘川を守るために、自分はゴミを捨てないようにしたいという思いを持つことにつながったと考える。

このことから、本授業が、道徳的価値の自覚を深めるために有効に働いたと考えられる。

ウ　授業の効果のまとめ

【実践３】では、総合単元的な道徳学習を構想・実施し、その効果を検証した。その結果、次のようなことが明らかになった。

(１)総合単元的な道徳学習では、事前の体験活動の児童の感想等により、道徳的価値に関する児童の意識を把握でき、その意識をもとに道徳授業の指導計画を立て、指導にいかすことができる。そのことによって、体験活動時に気づくことのできなかった道徳的価値に気づかせることができ、道徳的価値について多面的・多角的な見方へと発展させることができる。

(２)体験活動の意識が道徳授業に結びついているため、道徳的価値を自分自身との関わりで捉えることができる。

５　まとめ

本研究の結果、児童の体験活動での思いや考えを教師が捉え、それを道徳授業にいかすことで、発問は児童の体験活動に沿ってより具体化されたものになり、資料の読み取りではなく、児童の反応をいかした発問で構成される授業となる。結果、児童は体験活動をもとに、道徳的価値について自己との関わりで考え、多面的・多角的な見方へと発展させ道徳的価値の自覚を深めることができる。また、こうした道徳授業の中で､児童は自らの体験を想起し､その時の思考や感情をもって道徳的価値を捉えるので、まさに、道徳的価値の内面化が図られる。児童が道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めること、多面的・多角的な見方へと発展させ道徳的価値の自覚を深めていくことは、今後の道徳科の授業において求められる極めて重要な視点である。

つまり、体験活動をいかした道徳授業は、児童生徒の道徳性を養うために、道徳的価値の自覚を深める効果的な指導の在り方の一つであり、また、今後求められる道徳授業の姿であるといえる。

今後も、本論文で明らかになったことを踏まえて、平成 30 年度に小学校で完全実施となる道徳科の授業の充実を図っていきたいと考える。

《参考文献》

・押谷由夫(1994)『道徳教育新時代』国土社
・押谷由夫(1994)『新しい教育を創る－体験活動を生かして－』明治図書
・押谷由夫(1995)『総合単元的な道徳学習の提唱』文溪堂
・押谷由夫・福岡県春日市春日野小学校著（1994)『新しい道徳教育を創る－体験活動を生かして－』明治図書
・香川県小学校道徳教育研究会(1991)『子どもが自ら学ぶ道徳教育－体験を生かした道徳授業の展開－』東洋館出版
・上薗恒太郎(2011)『連想法による道徳授業評価　教育臨床の技法』教育出版
・笹田博之編著(1995)『総合単元的道徳学習の実践』明治図書
・白木みどり(1999)「体験活動と道徳教育」『道徳と教育』日本道徳学会
・瀬戸真編著(1986)『新道徳教育実践講座１自己をみつめる　道徳の時間における価値の主体的自覚』教育開発研究所
・瀬戸真編著(1986)『新道徳教育実践講座２道徳的体験と行為　道徳性の育成と道徳的実践力の指導』教育開発研究所
・田中恵子(2003)「思いやりの心をはぐくむ総合単元的道徳学習の展開－高齢者との体験活動を生かす工夫を通して－」『教育研究シリーズ 50』広島県立研修センター
・横山利弘(2007)『道徳教育、画餅からの脱却』暁教育図書